

Title	江戸・明治期における桐城派
Sub Title	On the Tongcheng school (桐城派) in Edo and Meiji Japan
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.174- 193
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0174">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0174</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 江戸・明治期における桐城派

桐城遺風也許很美、但美不如更新也会衰老、死亡。

人世間没有美的絶境、你的象牙之塔也不是美的絶境。

（劉再復）

佐藤一郎

### 一、序

いうまでもなく桐城派は清代最大の文学流派であり、民国に入ってから文学革命の時期まで伝統文学の中心勢力の地位を占めていた。現代中国の担い手となった知識人たちが嚴復の訳した『天演論』や林紆訳の『巴黎茶花女遺事』などの翻訳によって、欧米の思想・文学への眼を開かれたことはひろく知られている。嚴復は桐城派系の、林紆は呉汝綸の直弟子であって桐城派の学統の継承者であり、格調高い古文を駆使して翻訳を行ない画期的な成功を収めた。呉汝綸は進士出身であって曾国藩・李鴻章の線につながり、曾・李両名の秦疏の多くがかれの手に成るといわれた文豪である。曾・李は桐城派の信奉者であるとともに、清国の政治の方向を左右する実力者であった。この政界文壇における圧倒的な勢力の保持のために、一九一七年の文学革命に際しては「桐城の謬種<sup>\*</sup>」として、新知識人たちの打倒目標となるに至

るのだった。

それではこの桐城派は日本においてどのように評価され、かつ受容されてきただろうか。特に明治時代における影響と日中両国の学者の交遊関係には、軽視できないものがある。先に挙げた呉汝綸や、駐日公使として明治十四年に着任した黎庶昌の直接的な影響によって、常に中国での新しい詩文の動向に注意を怠らなかつた日本の漢文作者たちの文風に変化が生じたのである。猪口篤志氏が『日本漢文学史』（角川書店昭和五十九）の序文で言及しているように、「実をいえば、明治は日本の漢詩文の最高に発達した時代であるが、従来の日本漢文学史で明治・大正に説き及んだものは稀である」のが実情といえよう。それにはまず個別研究を進める必要があり、本稿もそのための一石となる筈のものである。

## 二、江戸期の桐城派

もちろん桐城派の始祖方苞以下の存在が日本に知られたのは、江戸時代のことである。ただし方苞・劉大魁・姚鼐の知名度がそれほど高かつたわけではないが、桐城派の源流ともいうべき明の帰有光への言及は主要な学者・文人の間にはひろく見られる。伊藤仁斎の『童子問』巻の下には、「方正学・王遵巖・帰震川等皆近世の大家、正（ただし）して法有り。必之を読むべし」とあり、徂徠学派が古文辞派の李攀竜・王世貞を強調する以前に正当なる評価をうけていたことが知られるのである。降って文政年間には訓点本の『帰震川文粹』全五冊も行われているから、一般の知識人にもなじみのない存在ではない筈である。蔵書目録の完備している廣瀬淡窓・旭莊の書目中には桐城三祖の著述はないが、梅墩蔵書目録（廣瀬謙、字は吉甫、通称は謙吉、号は旭莊・梅墩）には『帰震川集』十二本二帙の記載がある。

豊後日出の帆足万里、字は鵬卿、号は愚亭は儒者にして蘭学者を兼ている。三浦梅園の条理学を基礎として窮理（物理）学に志し、『窮理通』を著した。一方、『肆業餘論』卷之一において明文を論じて次のように述べている。「明文方孝孺第一、王陽明次之、宋濂則敷暢、少抑揚頓挫之妙。……帰有光却有佳處、恨下不多見。」清の詩文を喜ばない万里も、明は評価するのだった。

江戸市井の大学者市野述庵は校勘の学を好み、晩年はもっぱら松崎慊堂・狩谷掖斎のような考証学の大家とのみ交際した。かれの友人である松崎慊堂は、「迷庵市野先生碣銘」のなかで、「文は宋明に出入し、帰有光を以て宗となす。然れども多くは稿を留めず、僅かに遺文二卷を存するのみ」と断定している。山田琢訳注本の『慊堂日曆』全六卷（平凡社東洋文庫）は、期せずして江戸後期の一種の学術史の側面を備えている。卷三の文政十三年閏月十日の前述の記事にはじまり、以下三回震川集に触れている。友人市野迷庵の影響という点もあるに違いない。

「巻五 天保八年六月四日 枕を支えて震川集を読む。

天保八年七月二日 終日、震川集を読む。

天保十年四月二十九日 ○吾が道は一以てこれを貫く『論語』。震川集孔子の一となる所以のもの、蓋し特に指すところありて未だ発せず、その実は忠恕を指して言うのみ。曾子は門人が未だ達せざるに困って、始めてこれを明言するなり」

それでは江戸期きつてのベスト・セラー『日本外史』の作者にして、清朝の文壇の最新の動向に敏感な頼山陽の場合はどうであつたらうか。三十五歳の山陽は文化十一年七月十五日、折から福山藩の公用にて江戸入りしていた師の菅茶山にあてて手紙を書いている。

「江戸の詩文如何御座候や、ヤハリ随園を金科玉條に仕候や。文は金聖嘆、書は清朝舶商のみと奉存候。中晩〔唐〕詩を稍々読候ものも有之と承候。如何二候や。」『頼山陽書簡集』上巻 民友社 昭和二年）これは江戸の市川寛斎・市河米庵・大窪詩佛・菊池五山等を意識しての発言に違いない。山陽は自分自身では日本の蘇東坡を以て任じていたにもかかわらず、時人は多く清朝の性靈派の代表者袁枚号は随園を以て見做していた。その性情や作風に共通点が多く、才女好みの性癖まで似ていたからである。

『頼山陽書簡集続編』徳富猪一郎・木崎愛吉共編（民友社 昭和四年刊）の注において、編者はいつている。「角田九華は山陽の文を評して、唐宋八家よりも清朝人に近いと言ったことがあるが、この手紙を見ても、如何に其の清朝人の文を見るに汲々としているかが、よく窺はれる。山陽は清朝の古文を如何に観ていたか、〈書後〉に少しばかり出ているところを見ると、これを概して、『明体を襲うことを愧じ、亦宋様に依ることを欲せず、ここに於て一種洗練剪削の文を作り、唐人を学べりというも、その実は亦帰震川の支裔たるのみ』と評し、……その他、清朝諸家の文集を涉獵するに力めていた。桐城一派のものは見ていたか否を詳かにしないが、門人森田節齋の如きは、師伝に由りてこれを愛読したらしく、邵青門の文も昌平版として刊行さるようにもなり、明治時代に入りては、一時桐城を談せずば、古文を論ずる資格がないように、争うて姚姬伝を学ぶに至ったのであるが、遠くこれを遡れば、〈洗練剪削〉を以て山陽の概論したところあたりに、その源を発してはいなかったか。」

言志派系の山陽と載道派系の桐城の文学とは思想的立場ではもとより大きな隔たりがあるが、文章錬磨の手段においては近いものがあるというのである。四十五歳、文政七年（？）五月十四日付の秋吉雲桂への手紙において、「彼〔方〕望溪全書之事、承知仕候、いまだにうれずにあるや、何様一見仕度候、其上ニて直段如何様とも引合可申候」とあるか

ら、もちろん方苞の存在は承知しているはずである。さらに五十三歳、天保三年二月十三日の村瀬藤城あての手紙では、『壯悔堂文集』の買入方を依頼している。清初の古文作家侯方域は表現が派手で且つ文人気質が濃厚な点など、いかにも山陽好みである。「時に此節、侯朝宗文集新舶來とて見せ來候。是は江戸に一部あるとて、勢儒斎藤拙堂購獲候よし、先年承、羨しく存候處にて快誦候。清朝古文名家、魏叔子・侯朝宗を首と致、方望溪・朱竹垞・汪堯峯など、申様之數家に不過。亭林・堯峯などは、經学を主とする人、竹垞ハ詩、望溪ハ理学などにて、文を主とするハ魏侯二家ニ候。八家の後、明之方正学・王遵岳・唐荆川・帰震川など之外ハ、所謂李何王李之類、明末清初にて、古文辞と、八家との間を行もの多候て、此二家最較著之もの也。」

山陽の明の帰震川と清の方望溪に対する態度がこれでほぼ明かであり、この山陽に至って漢詩文の日本化の度合が顕著になってきた。考証学者の松崎憐堂でさえ、その『日曆』の文政十年十二月八日の条で、「文に和習あつて始めてこれ真の文。漢に漢習あり、唐宋に唐宋の習あり。和に和習なければ、和人の文となさず。」と断言しているほど時代全般にこの傾向が強まっていたのである。

もともと山陽の作風には、学者の一部には反撥もあつた。富士川英郎の『江戸後期の詩人たち』（筑摩）に、次のような記述が見られる。「佐藤一斎は『山陽のように無学文盲でなければ名文は書けぬ』と言つたそうだが、これも単なる皮肉や揶揄ではなかつたろう。なぜならば、しばしば文章の規範から逸脱しながらも、ぜんたいに生氣が躍動していて、叙事と諧謔の面白味をそなえている山陽のそのような文章は、昌平黌をはじめとする官学派の儒者たちにはとうてい書けぬものであつたからである。」

文論の分野での日本人の著述のうち、最高の水準を示している業績はといえば、それは津藩儒齋藤拙堂の『拙堂文話』

八巻でなければならぬ。同時期の詩話では菊池五山の『五山堂詩話』があるが、文話では誰しも『拙堂文話』を真先に挙げるだろう。帰有光については、「繼王唐而起者、為婦震川。震川為文、原本經術。好太史公、比王唐之文、其大不及、古則過之。故能使王弼州心服焉。」(王唐の王は王遵巖、唐は唐荆川)といい、それほど高く評価しているわけではない。ただ古文辞派の王世貞が後に帰有光を評価するに至る原因を、王・唐に比べて「其の大は及ばざれども、古は則ち之に過ぐ。」に求めているのは、けだし卓見であらう。

方苞については巻一と巻二で言及しており、前者では次のように厳しい見解を示している。「近人好改前輩之文者、自謂得古文法。觀其自運、往往措語迂回、下字冗漫、猶多可刪改者。古文法不当如此。抑又暇改他人之文哉。方望溪刪改八家文、屈悔翁改杜詩。余以為八家少陵復生、必有低俯心而遵其改者、必有反覆辨論而不遵其改者。要之抉摘於字句間、雖六經頗有可議處。固無勞二公之舍其田而芸人之田也。方屈皆西土有名之士、猶貽嗤笑。況其佗乎。」

すなわち方苞独自の〈洗練剪削〉ぶりに納得せず、異を唱えているのである。巻二ではさらに、「清人嘖嘖稱方望溪之文、推為大家。余閱其集、平平無奇。朱竹垞之文、亦穩而不奇。皆不及明氏作家遠矣。然二子皆醇儒、要不得不以大家歸之。」

実は「平平無奇」なればこそ清代の時代精神に合致したわけで、その文風自体の本質は理解しながらも桐城派流行の背景は把握しているとはいえなかったのだった。

これより後は幕末の激動期に入り、志士の文学の色彩が強まって来る。拙堂自身も阿片戦争の報に接し、『海外異伝』を著しているような情況となってきた。政治上の変革はただちに日本に伝えられ、それに対する反応が生じるが、文学上の流行が日本の知識人に受容されるのには時間的に数十年から数百年のずれがあることが普通であり、桐城派のよう

な地味な文学運動が日本に入って血肉化されるためには、明治まで待つ必要があったように思われるのである。いずれにせよ江戸時代を通じて、桐城派が学界・文壇の主流に大きな影響を及ぼしたことは、ついになかったのだった。

### 三、江戸期の長崎と中国文化

江戸時代の日本人にとって、中国は聖賢の国として理想化されていた。その中国にもっとも近い場所として長崎は知識人たちのあこがれのまどだった。篠崎小竹は享和三年に、市河米庵は文化元年に、大槻平泉・盤里は文化二年に、武元登々庵は文化五年に、浦上春琴市河寛齋は文化十一年に、頼杏坪は文化十二年に長崎に往来していることが前出の『頼山陽書翰集』に見えている。

この知友たちの長崎行に刺激されたことも考えられるが、文政元年三月六日、数えて三十九歳の山陽〔〕は京都の塾を閉鎖して広島の実家に立寄り、いよいよ九州旅行に出発したのである。当日附での大阪在住の親友篠崎小竹へあてた手紙において、「時に廓然之後、繼ぐに浩然勃然を以て、序に長崎迄と思立申候。此度を失ひ候ては、多年之志遂げ難しと存じ申候」とその胸中を告白している。かくて五月二十三日に長崎入りし、八月二十三日までちょうど三か月間滞在したが、鎖国体制の下では合法的に中国へ渡る手段はない。かくて茂木より乗船、天草の海を横切つて熊本へ着いたのが二十四日のことだった。この海上で脳裏にひらめいたのが、「天草洋に泊す」の傑作である。心眼によって大洋の彼方にあこがれの中国大陸を見、「雲耶山耶呉耶越か、水天髣髴青一髮」の名句を得たのである。

鎖国とはいっても中国・朝鮮・オランダとは貿易関係があり、外交関係も一部存在していたのだから完全な鎖国というわけではない。長崎には唐船が来航し唐通事があり、唐人屋敷が存在し、唐寺の三福寺すなわち福濟寺・興福寺・崇



福寺が栄え渡來僧が住持した。唐船は琉球を除けば長崎にだけ入港したから、舶來の文物も長崎がもっとも安かった。漢籍にも長崎値段・大坂値段・江戸値段とあり、東へ行くほど高くなった。儒者や文人が長崎を目指したことは、実利的な面も当然考えられよう。九州佐伯毛利家は僅か二万石の小大名であるにもかかわらず、漢籍の質量において前田家百二万石の尊經閣文庫と較べてもさして見劣りしない蔵書を誇り得たのでも、長崎の地の利があればこそであろう。

山陽の父の春水は、長崎への一遊を欲して果たさず、遂に広島藩の儒者として生涯を終えたのである。

#### 四、江戸時代と明治維新

日本の現在の経済的成功を契機に、成功の背景の分析が諸外国でさかんに行なわれるようになった。戦前まではせいぜい明治維新まで遡るのがやっとであったが、今日ではその基盤としての江戸時代の諸条件がしきりに吟味されている。康有為・梁啓超を中心とする維新派の人々は、明治維新を手本としたことでひろく知られている。ところが、近代日本発展の原因を明治維新の時期に求めるだけでは不十分であり、その発展の基礎は江戸時代に求めるべきではないかとの声が、内外からしきりに挙っている。管見の及ぶ範囲だけでも、R・P・ドーア『江戸時代の教育』（岩波書店）、大石慎三郎・中根千枝等の『江戸時代と近代化』（筑摩書房）、速水融編『歴史の近代化』（東洋経済）、渡辺浩『近世日本社会と宋学』（東京大学出版会）は示唆に富んでいる。

経済的には幕末開港前に先進機業地帯が成立しており、十八世紀の末から十九世紀の初めにかけて初期資本主義の段階に入ったと、『世界資本主義と明治維新』（青木書店）の著者中村哲氏は断定している。

市民の学問と縁の深い懷徳堂学派も、「義にかなう利」すなわち「義欲」を肯定する。宮本又次氏は『町人社会の人間

群像』（ペリかん社）のなかで、「義欲の是認は、そのままに天下国家を考えてのものであり、それは明治以降へ士魂商才」として発展し、またナショナリズムへ志向する要素をもつ。渋沢栄一的な〈論語と算盤〉や住友の伊庭貞剛的な〈自利他公私一如〉の精神は、こうした系列によるものである。それらはいわば大商人エリートであり、〈読書人としての商人〉であった。」

明治維新前夜には日本では合理的思考<sup>②</sup>と初期資本主義の段階に進んでおり、やがて政治的変革を経て文明開化の世を迎えることになるのである。

##### 五、清国駐日公使と明治の桐城派

中村敬宇が『西国立志編』の刊行を果たしたのは明治七年であり、福沢諭吉が『学問のすすめ』初編を書きあげたのは明治四年十一月ごろであった。薩長藩閥政府の性格も強く、旧幕臣で外国奉行にまで進んだ奥儒者出身の成島柳北著『柳橋新誌』（山城屋政吉 明治七年）は、一方的な改革に反感を抱いていた佐幕系の人びとの共感を呼んだのである。加藤周一は『日本文学史序説』下（筑摩書房）において、「『柳橋新誌』の第二篇と三篇序では、みずから『無用の人』と称する柳北が、『王政一新して柳橋一新した光景を描き尽くして、その時代批判が痛烈を極める。時代批判は、一方では、福沢の『丁丑公論』のように、旧幕臣の変節に向けられる」と評価するのである。

柳北の戯作調漢文の風刺は、為政者や知識人のほとんどすべてが一定の漢詩文の素養を有することを前提に成立していた。明治初年には欧米を目標として近代化を急ぐ日本にとって、中国は理想像ではなくなったが、依然として漢字文化圏共通の遺産を持つという親近感を抱いていた。しかも江戸時代には長崎までしか接近できなかった中国大陸へも、

自由に往来する道が拓けたのだった。

「日本は明治三年（一八七〇）柳原前光を清国につかわして修好条約のせぶみをさせ、明治四年伊達宗城をやって修好条約をむすばせ、明治六年外務卿福島種臣がでかけて批准交換をおえた。日本では明治七年初代公使として柳原前光が北京に着任、交民巷のホテルに公使館をひらいた。

中国では光緒二（明治九）年になって駐日公使に何如璋<sup>③</sup>を任命した。何如璋が出発しようとしたところ西郷隆盛の事件がおこったので出発をみあわせ、明治一〇年九月十九日になって北京をたち、天津南京にたちより、一月二七日軍艦海安号にのり、上海をたつて日本にむかった。」（実藤恵秀編訳『大河内文書』明治日中文化人の交遊『平凡社』）

何如璋は清国駐日公使二品頂戴翰林院侍講学士、その下に黄遵憲字は公度が、参贊（書記官）五品銜即選知県として随行している。黄は拳人の資格を持ち、来日して『日本雑事詩』を著して新派詩の代表選手となり、さらに帰国後『日本国志』四十巻を完成している。かくて両国の政治家・知識人の間に、直接の交遊関係が生ずるに至ったのである。

再び猪口篤志著『日本漢文学史』第六章 明治時代の漢文学」の記述に戻ろう。「漢詩のみではない。文章（漢文）においても、その高き者は夔かに往古を凌ぐものがある。重野成斎・川田甕江・三島中洲の三大家の外、土井警牙・菊池三溪・岡鹿門・中村敬宇・竹添井井あり、駕を並べ俱に馳するに足る。一斎・宥陰・息軒・拙堂といえどもひとり美を前にほしいままにすることはできない。まことに漢詩文は明治に至って最高潮に達したといつてよいであろう。その原因として、私塾・詩社の発達・発表機関としての新聞・雑誌の役割、天勳・功臣の好尚が大きいと考える。」

この機運をいっそう増幅させたのは明治十四（光緒七）年三月の黎庶昌字は莚齋の駐日公使発令である。蔡冠洛編の『清代七百名人傳』下（香港 遠東図書公司）は、かれを「文学」に分類して次のように述べている。「會曾文正公駐軍

安慶、上命以知縣往安慶大營差遣、文正優禮之。嘗謂純齋生長辺隅、意氣邁往、行文堅確、鏗而不含、可成一家言。文正幕中當世賢豪、庶昌與武昌張廉卿・桐城吳摯甫・無錫薛叔耘・淑浦向伯常交尤篤。文正沒、浮沈州縣近十年。充出使英法德日四國參贊五六年。未盡所用、鬱鬱不樂。已而驟用為出使日本大臣、任將滿、遽丁内艱、服闋。復起用、前後凡變使六年。熟通彼此之情、因機適變、剛柔互濟、鄰邦歎異、折服之。暇至東京書肆、搜羅宋元舊籍、與宜都楊守敬商榷、刻成古逸叢書凡二百卷、二十六種。皆中土希見之本。」

黎庶昌は政治家であると共に、桐城派古文の大家で、のちに『続古文辞類纂』(二十八卷を編集し、文集には『拙尊園叢稿』六卷がある。中国の学問と文学を代表する日本国欽差大臣を迎えて、にわかには桐城派への関心が朝野の人士の間に高まった。そのなよりの證據としては、「明治十四年十一月供存書房藏梓」の刊記がある『海峯文集』がある。奥付けには明治十四年十月十八日翻刻出版届、出版人は神奈川縣平民岸田吟香、愛知縣士族林安之助、東京府平民磯部太郎兵衛とあり、発兌書房には東京は北島茂兵衛以下八店、西京は北村四郎兵衛以下五店、大坂は柳原喜兵衛以下七店、名古屋は片野東四郎以下四店、甲府内藤傳右衛門、静岡廣瀬市藏が名を連ね、全国規模の出版であることを示している。全八巻十冊、封面には「海峯文集八巻怪吾書首」とあり、題僉には「海峯文集荆州楊守敬題甲」とあり、全十冊にはすべて楊守敬の筆に成る題僉が貼られており、それぞれの冊には冊数を示す甲より癸に至る十千の文字が書分けられている。一巻は論著、二巻は書、三・四巻は序、五巻は記、六巻は傳、七巻は墓誌・墓表・行狀、八巻は祭文と贊、四巻および七巻がそれぞれ二冊に分かれている。八巻の末に劉大櫔の弟子劉琢の跋文がある。劉聲木の『桐城文学淵源考』卷三にいう。「劉琢、桐城人諸生。師事族兄劉大櫔、受古文法。從游最久、朝夕得其講論。詩古文詞皆有法律。撰魯堂詩集一卷、文集一卷。」

楊守敬、字は惺吾。すなわち封面の文字もかれの筆である。光緒六年（明治十三年）何如璋の招きで来日、『古逸叢書』の編集に当たった。ほかに『日本訪書志』十六卷、『水経注疏』八十卷などの名著がある。

供存書房本は結局のところ、桂五十郎著『漢籍解題』所収の『海峯文集』八卷と同一の版本に基づく白文本である。しかしながら「首に大樞の友人なる呉士玉の序あり、尾に弟なる琢敬の跋あり」とあるが、正しくは「尾に族弟たる琢の跋あり」とすべきところである。「敬跋」は「敬（つつし）みて跋す」でなければならぬ。

奥付けの岸田吟香は、天保四年（一八三三）～明治三八（一九〇五）。美作国出身の企業家にして、新聞事業家である。幼時、津山藩儒昌谷精溪に学び、十七歳江戸に遊学、林圀書頭の塾に入り、一旦帰郷の上、安政三年再上京。藤森天山について勉強し、師天山が幕府の忌諱にふれ追放されるや、韜晦潜伏、文久の末年、箕作秋坪の斡旋で横浜在住のヘボンの家に寓し、和英辞書の編纂に従事し、上海に渡った。……明治五年『東京日日新聞』記者。明治十年記者をやめて銀座に楽善堂菜舗を設け、眼薬精綺水を販売した。晩年中国に遊び、東亜同文会・同仁会の創設に尽力した。年七十三で没。その子に画家岸田劉生がある。（『明治維新人名辞典』吉川弘文館）

かの俞樾の『東瀛詩選』の序に「以其国人所撰詩百数十家、請余选定」とあるが、その日本人は岸田吟香その人である。いうまでもなく『東瀛詩選』四十巻補遺四巻は日本の漢詩人のほとんどすべての名家を網羅して、中国の知識人に日本の漢詩の概要を知らしめた大作である。

ところで、岸田吟香の日記の一部分が残っている。『岸田吟香日記』（近代日本学芸資料叢書第七輯 朝倉治彦解説）の明治二十四年年頭の交遊関係を見ておこう。以下、吟香の日記の本文と朝倉氏の解説を引用する。解説部分は括弧の部分である。

(明治二十四年は吟香五十九歳で、樂善堂を足場にして、中国貿易に尽力していた時であった。)

一月十日 重野安釋来訪相談。(重野は二十二年貴族院議員、二十三年史誌編纂掛委員長となっていた。四十三年没、八十四歳)

一月十三日 朝鮮国公使ら来訪。

一月十七日 小野湖山、長坂雲在より手紙。

斯文学会へ行く。南摩綱紀、島地黙雷、重野成斎、島田重礼、松平信成、棚橋一郎、高島嘉右衛門、岡本監輔、岡松、蒲生らに会う。

一月二十五日 仁礼敬之、重野成斎へ手紙。

二月七日 支那公使より使者来る。

二月十五日 黎庶昌帰国を新橋に送る。中村敬宇など来る。

以上抜書きした個所だけでも、中国・朝鮮両国公使をはじめその関係者、日本の漢詩文壇を代表する人たちとの親密なる交遊ぶりが窺われるのである。さらに岸田の資力がなんらかの形で背景にある様子であり、『海峯文集』刊行に際しても一肌脱いだものと察せられる。

なお、本書の封面右隅及び各冊の同一個所に「本城藏書」の朱印があり、これが本城問亭である可能性が濃厚である。かれは三島中洲・重野成斎に教えを受け一家を成した。「嘗て曰く、我を生む者は父母。我を教うる者は中洲三島子。我を知る者は重野成斎と服部愛軒なり」と。その詳傳は、竹林貫一編『漢学者傳記集成』にある。また『問亭遺文』八卷四冊(本城水棹子 大正五年一月刊)所収の「三里濱古杯記」の評言にも、「中村桜溪曰、淡掃有致、自是桐城之規矧」と

あり、これは当時の漢文作者の間で桐城古文が一つの標準となっていたことの証據といえよう。刊年の大正五年はすなわち一九一六年、文学革命の前年であった。本城問亭は越前三国の人。大正四年一月、五十二歳を以て生涯を閉じた。

この問亭旧蔵の『海峯文集』には、朱または墨で句点と段落を切つてある個所がかなりあり、筆者皆遊の浮山の紀行文「浮山記」の頭には「華嚴寺」へ「金谷巖」の書入がある。注目に値するのは「嚴逢青詩集序」に朱筆で、「首一段論文似為此一二句伏案者然以堯典皋謨文王周公孔子易春秋起筆過重最甚」の書入があり、文章家の視点で本書を精読した跡が残っていることである。方苞・劉大櫟・姚鼐の桐城三祖のうち、もっとも知名度の低かった劉大櫟の文集がこのような形で日本で刊行され精読されたことは、桐城派古文が体系として理解されるに至つた事実を雄弁に物語るものである。

#### 六、重野安繹・藤野海南・宮島大八

明治の漢詩文の大家のうち、桐城派の影響が指摘されているのは、重野安繹である。神田喜一郎は「日本の漢文学」なる文章のなかで、「重野成斎(安繹)はじめ当時の漢文作家は、黎から桐城派の主張を聞いて、大いに感心したもので、殊に藤野海南(一八二六―八八)とか亀谷省軒へかめたにせいけん(一八三八―一九一三)などは、ひどく傾倒したものであったが、しかし、いくらか影響があつただけで、日本の漢文を一変せしめるまでには至らなかつた」といっているが、中国の文章流派としてはもっとも新しく日本に入ったものといえよう。『桐城文学淵源考』巻十では宮島彦、巻十一では藤野正敬すなわち海南をその学統のなかに数えている。

重野安繹については『漢学者傳記集成』や小川貫道編の『漢学者傳記及著述集覽』に当たるまでもなく、『広辞苑』に

もその略歴の記載がある。ここでは猪口篤志の『日本漢文学史』の叙述に頼ることにしよう。

「成斎、人となり沈毅端嚴、史学に邃く文章をよくし、文壇の牛耳を執ること三十年、世推して泰斗とした。その文章はじめは欧・蘇を好み、晩に桐城を宗とするに至った。しかしその作るところはかえって初編が尤もよく、桐城の影響を受けた三編は見劣りがする。門人は日下勺水・館森袖海らがある。松平天行はいう、

先生の文、尤も体格を重んじ、莊重典雅、束帯にして朝に立つが如し。昔陸士衡、人その才の多きを患ふ。先生は才多しと雖も、務めて其の華を斂め、隱約して之を出す。綱を尚へて錦の見はるるが如く、微雲の月を漏らすが如く、土中の宝剑の氣、斗牛を衝いて光彩闇然たるが如し。文品甚だ高し。世或はその氣骨に乏しきを病むも、是れ端し章甫せる赤也をして戈を衛門に執らしむものなり。烏んぞ可ならんや」

重野安繹が漢詩文壇の盟主格の地位に就くに至るのは、討幕の主力を成した薩摩出身という事情も働いているだろう。明治になっても交遊の続く会津藩出身の南摩羽峯・秋月韋軒等は昌平學時代から熟知の間柄であり、藤野海南は旧松山藩というように、その周辺には佐幕藩閥関係者も多かった。薩長閥下の佐幕派人材の活躍については大久保利通の令孫大久保利謙に『佐幕派論議』（吉川弘文館）の著があるが、明治初年の社会の实情としては緊張と無視の態度が一般的だった。官撰の史書の責任者に薩摩出身の衆望ある人物を据えることは、藩閥政府の意向と合致するものであった。この間の事情を前出の『日本漢文学史』では、次のように叙述するのである。

「すなわち明治二年、大学校に国史編集局を開き、漢文を以て国史を編輯する計画があり、八年太政官内に修史局を設置、編年史の編纂を創めたので、諸藩の詞章家が東京に雲集した。文才あるものは登用の途が開かれたためと、各藩に多少の思わくもあって、競って俊秀を送ったせいもある。自然薩摩出身の重野成斎が牛耳を執ることになる。明治五



年、藤野海南の主唱で旧雨社が創設されるが、文章は成斎が品評した。これはあながちその実力ばかりではなからう。……旧雨社の社盟には、藤野海南・重野成斎・岡鹿門・鷺津毅堂・阪谷朗盧・青山鉄槍・南摩羽峯・秋月韋軒・木原老谷・増田岳陽・那珂梧楼・小山春山・隈静斎・大郷学橋・秋月古香・川田甕江・三島中洲・中村敬字・小笠原午橋・武富圯南・村山拙軒・薄井小蓮・萩原西疇・依田学海・蒲生聚亭・信夫恕軒・亀谷省軒・島田窠村・股野藍田・岡松甕谷・日下勺水、ほかに詩人仲間の小野湖山・鱸松塘・小永井小舟・広瀬林外・森春涛らが加わった。しかし十二年麗沢社が興る。その理由として『旧雨社のごとき友誼を敦くし、燕飲するのも結構だが、我々は幕末艱厄の際に身を完うし、今日の聖世を邀えたのだから、衰えた文運を隆んにし、維新の鴻業を舖蔽して報効を図るべきだ』というにあつて、成斎を盟主とし、毎月第一土曜を定例日と定めた。会する者は藤野海南・岡鹿門・巖谷古梅・亀谷省軒・蒲生聚亭・星野豊城・小牧桜泉・日下勺水らで、のちに植松果堂・塩谷青山・中村桜溪・松平天行らが加わった。

その後十四、五年(？)ごろになると旧雨・麗沢両社とも社友が凋謝し、一旦旧雨社を麗沢社に合併し、更に三十六年廻瀾社に合併した。廻瀾社の創設時は、鷺津毅堂・四屋穂峯・依田学海らがいたが、合併後の会員には中村桜溪・松平天行・内田遠湖・本城問亭・石川文荘らが加わった。」

これは明治の漢詩文壇の文社の概観として、もっとも要領を得たものといふことができよう。その指導的立場にあつた重野安緯の文集には、『成斎文初集』全三卷明治三十一年二月刊と、『成斎先生遺稿』全八卷大正十五年刊とがある。ほかに『成斎文』六卷も行われている。

『成斎文初集』卷二所収の「桜雲臺讌集記」にいう。「清國公使純齋黎君、駐節此土。毎遇重陽上巳辰、招邀吾同人、張文字飲、歳以為常。今茲三月三日、亦讌紅葉館。於是同人宵謀、以四月八日、請黎君及其僚属、賞花於上野桜雲臺、

非敢以爲報也。聊以尋交歡耳。」(ここには大官にして文豪たる黎庶昌を囲んだ詩文の雅宴の有様が、淡淡と叙述されている。)

同じく『初集』巻二の「佐瀬得所翁遺德碑」にいう。「遺德之碑、爲佐瀬得所翁建也。翁書師耳。……清國公使何如璋撰銘曰、善用我法。能爲人師。道進乎技。豈惟工書。惜余來之遲、不及見之。噫嘻。」

文中にも何如璋は登場しているが、さらに重野安繹の「佐瀬得所翁遺德碑」の文章を何如璋が高く評価した評語が付載されている。子峯は如璋の字である。「何子峯曰、其規模頗近桐城派。蓋根源亦八家來、而近歐陽公。」

中国の士大夫の文学を代表する清國公使に、当時の日本においてようやく新しい文学流派として意識されるに至った桐城派にその規模がさくぶる近いと評価されたのであるから、安繹が桐城派へ傾斜するのは無理はない。かれを以て歐陽修に近いと認めるのは、中村敬字の場合も同様である。「津崎村岡墓集」の重野安繹の文章への評語に「中村敬字曰、典雅豊潤、入廬陵之室。桐城以下不足道也。」とあり、桐城派などと比較するのは妥当ではないと断言するのである。敬字はついに桐城の理解者ではなかったといえようが、桐城の流派名がここに出ていることは同派の日本での流行を意味するものである。

明治二十一年(一八八八)三月十八日に藤野海南が六十三歳で没すると、安繹は「藤野伯迪墓碑銘」を書いて次のようにいっている。「歲戊子、余採訪文書在南海、聞伯迪訃、東望哭泣、悲不自禁。既抵松山、與其親戚故旧相弔。初伯迪之喪、清國公使黎純齋自撰銘置墓上。純齋常敬慕伯迪、然外人交淺、不能尽其生平。於是親戚故旧更建碑、属余銘。……銘曰、有德有学、君子之儒。黎氏作銘、墓上大書。彼異域人、猶且云然。矧我同邦、矧我同人。」

黎庶昌と藤野海南との親密なる交遊ぶりが偲ばれるのである。この事実は『桐城文学淵源考』巻十一でも触れられて

いる。「藤野正啓字伯迪号海南、日本伊豫松山人。與黎庶昌友善、以古文相切劘。其為文醇有法度。趣嚮桐城、亦取姚鼐曾國藩隱陽剛柔之說、以自輔。撰海南遺集三卷附録一卷。海南遺集拙尊園叢稿」

さらに『桐城文学淵源考』巻十には「宮島彦、字 日本 人、師事張裕釗七年、隸敏好学尤有遠志純行。濂亭遺文觀光紀遊夷牟溪廬詩文鈔」との記述がある。宮島彦は宮島栗香の子である。宮島栗香については前述の漢文学史に次のように出ている。「宮島栗香（一八三八—一九一一）、名は誠一郎。米沢の人。父は吉利、一瓢と号し藩の右筆であった。栗香はその長男、天保九年の生まれである。はじめ山田嬖堂に学び、詩をよくした。幕末維新の際、奥州諸藩の建白書を携え、苦心の末これを朝廷に推達した。明治三年徴されて待詔院に出仕し、のちに左院に転じ、十年修史館御用係、十七年参議官補、二十九年貴族院議員に勅撰され、四十四年三月病没した。年七十四。『養浩堂集』三巻がある。栗香は詩才天授、同門の窪田梨溪・雲井竜雄と共に、米沢の生んだ明治の大詩人である。清国公使参贊として来日した黄遵憲は、『詩才遠く及ばず』と驚嘆している。ただ従来あまり知られていなかった。今はその晩年の作を併せ、取捨を加え、やはり『養浩堂集』と名づけ二冊として善隣書院より刊行されている。（栗香の子大八<sup>8</sup>）は詠士と号し、善隣書院を開いた人、書をよくするを以て鳴った。）

宮島大八すなわち彦が師事した張裕釗は桐城派の大家である。『桐城派文学淵源考』全十三巻のうち、巻十はもっぱら張裕釗・呉汝綸系の作者を以て当てているほどである。すなわち、「此巻專記師事及私淑張裕釗呉汝綸諸人」との記述が、巻十の巻頭にある。張裕釗には『濂亭文集』と『濂亭遺文』があるが、後者の巻一所収の「養浩堂詩集序」にいう。

「故至今、称蕤齋使日本。其風流勝事、他国使臣之所未也。而日本宮内員宮島君栗香者寛敦有明略、喜為詩、與蕤齋交尤篤。是時余長子沆、亦從蕤齋往、乃亦益與君善。而君有子彦、穎敏好学、尤有遠志純行。蕤齋及長子沆既歸。踰年

而君乃命其子彦来中国、従余游今七年矣。其後純齋再使日本、與君益投分無間、唱酬往還殆無虛日。純齋屢以書告余道、日本宮島君之賢。而君嘗取往從純齋及長子沆、相與筆談語、裝為卷。命彦以視余其相好也。」

これにより黎庶昌と宮島栗香の交遊ぶり、張裕釗と栗香との交遊および彦との師弟関係が証明されるのである。

いじょうの事実により何如璋・黎庶昌と親交のあった日本人は政府の要人にして漢詩文を能くする者よりも、学者や民間人に多かったことが注目されよう。これは次第に緊張した関係に入っていく両国の歴史のなかで、貴重な文化交流の時期の記録として再評価されるべきものなのである。

〔注〕

(1) 佐藤一郎「長崎遠望―頼山陽のこと」(『北葉』第25号一九八二)

(2) 源了円『徳川合理思想の系譜』(中央公論社)

同書の「洋学受容と儒教の章でいう。「徂徠以後の思想の課題は、徂徠の文献学的実証主義、さらにはひろく実証主義的態度の正当性や、道徳から独立した政治の世界の存在を認めつつ、徂徠によって閑却された自然や事物の合理的探求を推しすすめることであった。この場合の理はもはや思弁的性格の空理・空論ではなく、実験・実証に裏付けられた実理でなければならなかった。ここにおいて徂徠以後の合理的思惟は、朱子学の理を西洋の自然科学の理と同一視して、両者の同一化の下に進められるか、さらには儒教の本源に遡って易の中にある理の思想を、西洋の自然科学の影響を受けつつ、やがてはその母胎から離れて自由に発展させることを通じてなされた。

(3) 楊正光著今枝二郎訳の『日中関係簡史』(五月書房)にいう。「翌年の十二月の初め、何如璋の一行が神戸に着いて京都・大坂・兵庫を観光した時、神戸はほとんどの家々が提灯を吊して旗を掲げて、赴くところ日本人民が道をはさんで歓迎した。かれらはみなへ上国の衣冠を見ようと思った。中国の使節団は何百年も日本の国土を訪れておらず、この度の中国の使節派遣が数百年来の盛挙であると思った。」

(4) 黎庶昌編の『続古文辞類纂』は一八八九年(明治二十二年)刊。狩野直喜著の『清朝の制度と文学』(みすず書房)にい

う。「古文辞類纂」を続けしものに、王先謙ものと黎庶昌ものと一書あり。王書は選択の範圍較狭く桐城派に偏し、近人の文にて此の派に属せざるものは取らず。黎書は範圍較広く、勿論曾国藩を中心とすれども、其の取る所、必ずしも桐城派に限らず。従うて、黎書に輯むるものに佳文字多し。而して王書にも其の序文あれども、黎の序文遙かに其の上にあるを覚ゆ。「ちなみに王先謙は湖南長沙の人にして曾国藩と同省人。黎庶昌は貴州遵義の人であつて中央の学界から孤立し、門戸の見が少なかったものと思われる。

(5) 吳孟復選注『劉大櫟文選』(黄山書社一九八五)の後記に次の如くある。「劉大櫟在清代文名很大。其文集康熙時即有刊本、雍正時刻有《小称集》後來多次刻過。我們採用日本明治年間翻刻的方國校録本、并以清同治甲戌徐宗亮編校本為底本。因為方國是劉的学生、而徐宗亮是桐城近代著名文人。」

(6) 佐藤一郎『中国文章論』(研文出版一九八八)所収「方苞の散文」「戴名世・方苞の交遊より見たる桐城派古文の成立」参照。

(7) 大久保利謙著『佐幕派論議』(吉川弘文館)所収「福沢諭吉と明治初期の学会」にいう。「明治十四年の政変直後の十二月、この政変の影武者であつた井上毅が書いたメモ(進大臣)が残っています。これは政変後の政府のとるべき方策ですが、そのなかに福沢の勢力恐るべしとすることを強調しています。また英米系の学問をなるべく排除して、ドイツ系の学問を興さなければいけないということが一カ条。それから漢学を奨励すべきであるということを言っています。

(8) 宮島彦と大八は同一人物であることが、直孫の善隣書院院長宮島吉亮氏の証言により確認された。貞亮は同氏の父君であり、おなじく桐城派の影響が認められる。

\*追記・最近、魏際昌『桐城古文学派小史』(河北教育出版社 一九八八年四月)が刊行された。その後記に、「這是筆者三十年代の旧作、學習于北京大学研究院時的畢業論文、導師胡適教授。胡先生說「桐城派出在我們安徽、過去呼它、謬種、妖嬈、是不是可以有不同的看法呢? 希望能够研究一下。」言猶在耳、算來已經五十多年了。」とある。魏氏は河北大学中文系教授。